

『和田亀之助写真帳』

五十公野順一

川越高校の百周年記念誌「くすの木」の編集作業の過程で川越高校に関するさまざまな発見があったが、なかでも川越中学校の初代教務主任の和田亀之助が撮りためた写真アルバムを手に入れたことはたいへん大きなことであった。

たまたま、写真の準備・調達を役割としていたために和田亀之助とは深くかわるることになったが、古びたアルバムの写真を見るたびに感ずるのは、亀之助の撮影、現像に関する技術とセンスに対する驚きである。当時はレンズの性能も現在とは比較にならないし、フィルムなどはもちろん存在せずガラス板に写真乳剤を塗布した、いわゆる写真乾板に像を焼き付けるのであるから、これだけの写真を撮影するだけでも大仕事であったはずだ。亀之助はそれを遠足や修学旅行にも携行しているのだから、その労力たるや今の人間には想像することすら難しいものである。

「幻の花」を求めて

以下、和田亀之助の写真に出会った経緯を記念誌「くすの木」より再録させていただきます。

同窓会事務局で紀要から増し刷りしていただいたので、必要な方は事務局までご連絡ください。送料のみにてお分けしています。

百周年記念誌「くすの木」には紙数に限りがあったため、亀之助が残してくれた写真の大部分は掲載することができなかったが、昨年、川越高校「研究紀要」三六集に、それらの写真を掲載する機会を得た。準備に十分な時間をかけることができなかったので、掲載写真のかなりの枚数が「くすの木」掲載分と重複しているが、大判で

取録し、キャプションも付したもので、時代の記録としては貴重なものだと思う。

以下、和田亀之助の写真に出会った経緯を記念誌「くすの木」より再録させていただきます。

会が活動を始めたころであった。この本の中で我々にとって特に重要であったのは、博雄が父の二七回忌法要のために、兄武彦の家を訪れたときの記述である。

「父の法要の始まる前、書斎で兄と父のことを取り留めもなく話していたとき、兄が、ああ博雄、おまえに見せたいものがあるよ、と言って書棚の中から父の遺した古いアルバムを数冊出して見せた。……「父のアルバム」に貼られている写真は、先輩、同僚、親交のあったらしい同僚一家、川越中学校運動会、卒業生、寄宿舎生徒、軍事教練、川越 郊外への自転車遠足、川越郊外の雪……。その作品内容は多彩である。」

この「父のアルバム」が発見されれば、百周年記念誌の大きな日玉となる。

記念誌の写真担当者は、まさに「幻の花」を追い求めることになった。手がかりは、本の奥付のみである。著者の大竹啓介氏とどうにか連絡を取りわかったことは、「幻の花」を発行した一九八一年当時、亀之助の長男武彦氏(当時八四歳)に取材をしており、その際アルバムを見せてもらったということであった。さらに大竹氏は武彦氏の世田谷の住所と、和田博雄の書生であったという寺門功氏の住所を教えてくださった。

ところがその後、武彦氏には全く連絡がつかず、もうひとつの手がかりである寺門氏に連絡を取ってみると、武彦氏はすでに亡くなり、一人娘の久子氏が小田原に住んでいるという。それから小田原への連絡を始めるのだが、いくら電話をしても連絡が取れない。なかばあきらめかけていた一九九七



亀之助と家族／川越喜多院境内。亀之助に抱かれているのが博雄、後の農林大臣である。撮影場所の選定、家族の配置など細心の注意の後がうかがえる。
和田博雄の伝記『幻の花』には、この写真が掲載されていた。和田亀之助写真帳発見のきっかけとなった一葉である。

年三月、小田原の電話が通じたのである。

声の主は西尾吉一氏。久子氏の次女、佳子氏の夫に当たる。聞けば、世田谷の家には誰もおらず、久子氏が時折風を通しに行っていたが、その久子氏も半年ほど前に他界したとのことであった。小田原の家も転居することになっており、この日たまたま電話をとることができたようだ。事情を話すと快く協力を約束してくださったが、吉一氏自身はアルバムの存在を全く知らないという。とりあえずこれから遺品整理を始めるので、それらしいものがでてきたら川越高校に連絡を入れていただくというところで話は終わった。

その西尾吉一氏から、アルバムがあったという連絡をいただいたのが一九九七年九月八日。そして久子氏の長女、川越在住の和田美智子氏からアルバムを受け取ったのが十八日のことであった。

「父のアルバム」を手にしたときの我々の興奮と喜びをご理解いただけるであろうか。

まだ生徒のいない、植木すらも見あたらない完成直後の校舎全景をはじめ、まさしく「幻の花」に書かれていた写真が、五冊の古びたアルバムに詰まっていたのである。それらの写真の中にあった一葉、撮影したレンズ名を記録した写真がある。ダルメヤー、クック五類という二本のレンズ名をもとに、今回航空写真を撮影していただいた宮崎一雄氏に調べてもらおうと、当時の価格は一本六〇〇・七〇円、巡査の初任給が一〇円足らずだったことを思えばとんでもない高級品であったわけだ。

ともかく、開校当初、和田亀之助がいてくれたおかげで、我々は大変貴重な資料を手に入れることができたのである。みなさんも明治時代に思いを馳せて、じっくりご覧いただきたい。(高27回)